
僕の、億千万人の恋人たち。

上総 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の、億千万人の恋人たち。

【Nコード】

N7245D

【作者名】

上総 翼

【あらすじ】

ある国民的なマンガに、こんな話がある。ある朝、起きると自分が二人になっていた。次の日、起きるとまた、自分が増えていた。この物語は、ある日、二人に増えてしまった少女とその彼氏の少年の奮闘の記録である。

ブローグ すべての始まり

時は2013年、世界の人口は70億人になっていた。世界の各地では、急激な人口の増加に悩まされていた。その影響で、世界の人口の八分の一の人々が飢餓で苦しんでいた。

そんな関係ねえーと、言わんばかりに、物が満ち溢れていて、平和で技術が発展している、この国、日本では逆に、著しい人口の減少が、大きな社会問題になっていた。高齢者が増える一方で、子供の数が減っているためである。このままいけば、千年後には、日本人は一人になる。そんな恐ろしい予測も出ていた。そう、このままいけば……。

そんな日本の片隅、b半島と言う土地に、ごく普通の、一人の女の子が暮らしていた。彼女はある晩に、こんな不思議な夢を見た。彼女が、目を開けると、ベットの隣に、もう一人、人が眠っている様に見えた。誰だろうと思った彼女は、布団の中から、目を凝らして、そこに寝ている人物の顔を覗いてみた。次の瞬間、彼女は、背筋が凍りついた。なんと、その人物の顔は、自分の顔と瓜二つの顔をしていたのだった。それはまるで、鏡でも見ているようだった。その、彼女にそっくりな人物は、何事もないかの様に、気持ちよさそうに寝ていた。

彼女は考えをめぐらせた。こんな事が、実際に起こるのか、起きていいのかと、酷く恐れた。彼女は一瞬、前にもこんな光景を見たことがある、そんな気がした。でも、なかなか思い出せない。彼女は、これは夢であると思いに言い聞かせた。いや、夢であると思いたかった。彼女は、動揺を抑え、布団を深く被り、目を閉じた。少しでも落ち着こうとした。そして、彼女は、また、深い眠りに就いた。

この時、
すべては、
始まった。

ブローグ すべての始まり（後書き）

最近、書き始めたばかりの小説初心者なので若干、文章が固くなっているかもしれません。その事も含めて評価お願いします。

第一章 告白

今日の日付は、2013年1月24日木曜日。

外では、木枯らしが吹き荒れていたが、空は、見事に晴れ上がり、遠くには、雪を被った富士山の姿までも見えていた。

今日、俺は、あいつに、自分の思いを、はつきりと、伝えたいと思う。

そう、決心した一人の少年は、いつもの様に、自分のベットから起き上がった。そして、いつもの様に、紺色のブレザーに、学年色の青のネクタイ、チェックのズボンの制服に着替ると、リビングに向かった。

リビングで、テーブルの上に置かれた、朝食のパンを急いで口の中に入れた。その後、鞆を持ち、玄関で靴の紐を結び、「いつてきます。」の掛け声とともに、寒空の下を、学校へと、駆けていった。

家から最寄の駅まで、4分間の道のりを走る。最寄の駅から、銀色の車体に、黄色とライトブルー、2色の帯をまとった電車に乗って10分、更に、駅から歩いて20分程の所に、この少年が通う、^c県立Y高校はある。

彼は、職員室で鍵を受け取った。そして、「1年1組」と書かれた教室の前に立ち、教室の鍵を開けた。教室の中から、ひんやりした空気が流れ出してきた。そして彼は、誰もいない教室の中に入ると、自分の席に座った。

彼は、毎朝、こうして始業の40分前には教室に入っていた。しかし、これには理由があった。

彼の名前は、石井健^{いししいけん}。背丈は小柄で、165センチくらい。顔立ちは、中の中。眉毛は、細いとも、太いとも言えない普通の太さ。目は二重。鼻と口は、普通の大きさであった。水泳部に所属してお

り、球技以外のスポーツでは、神童的な実力を発揮していた。更に、定期テストでは、常に一位で、生徒会の会計も、務めていた。

健が、教室に入ってから、5分が経過した。その時、教室の、前の方の扉が開いた。

「健ちゃん、おはよう！今日も早いねっ。」

明るく、かん高い声が、教室に、響き渡った。

「おはよう。」

健は、返事を返した。そこには、白いセーラー服に、学年色である青色のスカーフ、チェック柄のスカートの、制服姿の女性が一人、立っていた。

彼女の名前は、水嶋清子。みずしま さやこ 背丈は157センチくらいで、体型は、すらりとしている。顔立ちは、古風な日本人の女性と言った感じで、真ん丸い輪郭に、ショートヘア、目と眉は細く、鼻と口が小さいのが、彼女の特徴だった。そして彼女は、健の、小学校の頃からの、幼馴染みであった。クラスも、部活も同じで、何かと関わり合いが有った。”健ちゃん”と言う呼び方は、小学生の時から、全く変わっていないかった。健と、清子は、こうして毎朝、早く学校に来ては、色々な、話を交わしていた。

挨拶が済むと、清子は、健の、隣の席に腰を下ろした。最初に口を開いたのは、健の方だった。

「あつ、あのさー清子。」

思いきった、大きな声で、健が言った。

「どうしたの、健ちゃん。そんな大きな声で。」

「今日、清子の誕生日だろ？これ、あげるよ。」

そう言うと、健は、鞆の中から、金色に輝く、ペンダントの入った箱を出した。そして、

「ほら、これ。」

と言いながら、清子に箱を手渡した。

「こっこれ、私に？物凄く高そうだけど、いいの？」

「いいに決まってるじゃないかー。」

戸惑う清子に、健が、自信満々に言った。しかし、健にとっては、16年の人生の中で、一番高いプレゼントだった。

「あと、もう一つ、言いたい事があるんだけど、いいかな？」

健が、緊張気味に、清子に言った。

清子は、何を言われるか、大体、分かっていた様子だった。

「なあーに？健ちゃん。」

清子は、期待した様な目で、健を見ながら言った。

「俺さ、実は、清子の事が、すっ、好きなんだ。出会ってから、ずっとずっと。だっ、だからつつ付き合ってくれないか！」

言ってしまった。健は、その刹那に、そう思った。

「やっぱり。健ちゃんなら、言ってくれるって、信じてたよ。」

清子が、満面の笑みで言った。

健が、次の言葉を言い出そうとしたその時、教室の前の扉が、勢い良く、開いた。

そこに立っていたのは、クラスメイトの、ながやまみな長山美奈とかわぎしなかつく河岸直継の二人だった。

「へえー、いい事、聞いちゃった。清子ちゃん、羨ましいなー。」

長い髪に、細いまゆが特徴的な、長山美奈が言った。

「まさか、石井君がそんな事を言うとはねー。以外なのよーん。」

縁めがね、ちりちりの、天然パーマが特徴の、河岸直継が言った。

「そつ、そんなんじゃないのよ。」

清子が、弱気な口調で言った。

「そつそつだよ。そんなのじゃないってば。」

健が、清子を、助ける様に言った。

「ふーん。そうなんだ。分かった。黙っといてあげる。」

長山が、笑顔で言った。

「長山さんがそう言うなら……。それでもいいのよーん。」

河岸は、真顔で答えた。

長山と、河岸は、何かを、こそこそ話しながら、それぞれ、自分の席に腰を降ろした。

健にとつて、さつきまでの15分間は、夢のような、一時であった。あんな返事を聞けるなんて、思っても見なかった。健は、幸せで一杯であった。

この日の、全ての授業が終わると、健は、生徒会室に出向き、この日の、会計としての仕事を片付ける。その後、部活動に合流した。健は、部室で、学年色の青色のジャージに着替え、この日の、トレーニングを開始した。この高校の水泳部では、冬季、土曜日の校外練習を除き、泳ぐ機会はなく、陸上トレーニングに専念していた。この日は、校庭を5周した後で、腕立て30回3セット、腹筋30回3セットと言ったメニューだった。y高校の水泳部は、特に、強いとは言われてはいなかった。しかし、健は、初めての千葉県の高校総体で、50メートル、100メートル、200メートルの自

由形の三種目で、軒並み一位を勝ちとっていた。そして、インターハイにおいても、その実力は発揮され、50メートル自由型で全国二位にまで上り詰めた。水泳部の顧問であり、1年1組の担任でもある生野勇治から「お前には実力がある。2016年の東京オリンピック、狙って見たらどうだ？」とまで言われた事もあった。しかし、健のこの実力は殆どの部分は健の、努力の賜物であった。

この日も、他の部員より、30分遅く、トレーニングを始めたにも関わらず、通常の、3倍のメニューを、こなそうとしていた。健は、この部活で、輝いていた。

一方で、水泳部には、もう一人、輝いている人物がいた。それは、清子だった。清子は、水泳部のマネージャーとして、部員一人一人の事を気遣い、献身的に尽くしていた。また、清子自身も、選手として、マネージャーの仕事が一段落した後、他の部員と同じ様に、トレーニングをこなしていた。

今日のように、部活のある日、健と清子が、メニューを終える頃には、殆どの部員は、メニューを終えて、帰宅していた。帰る時間は、ほぼ同じくらいで、帰る相手も特にいなかった。最寄駅も同じなので、健と清子は、一緒に帰る事が多かった。この日も、いつも通り、二人で帰る事になった。

冬の夜の、底冷えの通学路を、健と清子の二人が歩く。最初に、話を切り出したのは、清子の方だった。

「健ちゃん、今朝はありがとつ。私、すつごく嬉しかった。」

清子が、笑顔で言った。

「清子が喜んでくれて、ほんとの良かった・・・」

健は、照れくさそうに言った。

「健ちゃんったら、照れちゃて。でも、私、そんな所が好きなかも。」

そう言う、清子は、健の手を握りしめた。

初めての経験に、健は戸惑った。健が、兄弟以外の女性に、手を握られるなんてこれが初めてだったからだ。

清子と帰るのは、初めてではなかった。でも、正直言うと、初めて、二人で帰った日より、緊張していた。

普段なら、部活の事、勉強の事、二人の共通の趣味である星の事、話題は、尽きることはない筈なのに、どうも、話しだせない。

二人は、手を繋ぎながら、線路沿いの通学路を歩いていた。でも、二人の間に会話はなかった。この時、二人は一緒にいるだけで、幸せだった。

健と清子の二人は、学校の最寄駅であるs駅から、銀色の車体に、紺色と、クリーム色の帯の、快速電車に乗った。

二人の家の最寄駅、g駅までの10分間、もうすぐ、二人の時間が終わってしまう、健が、そう思っていた時、清子は、とても不思議の質問を、健にぶつけてきた。

「あのさー、健ちゃん。」

「なっなんだい、清子。」

不意に話し掛けられた健は、驚きながら言った。

「どっとうしたの、そんなに驚いて。」

「なんでもないよ、大丈夫。なんだい？清子。」

「もし、もしもの話しよ、その、私と、全く同じ私がもう一人、

いるとしたら、健ちゃんどうする？」

その質問を聞いた健は、一瞬、言ってる意味が理解できなかった。周りの乗客たちでさえも、清子に、視線を注いだ。

「あつ、これ、心理テストみたいな物だから……。心配しないでいいよ。」

この言葉を聞いて、健は、ほっとした。

「もし一人、清子がいたら……。そうだな、両方とも俺の知っている清子なら、二人とも守ってあげたいな。もしもだけど。」

健が、誇らしげに言った。

g 駅に着いて、改札口を出て、駅のコンコースに来たところで、二人の時間は終わりになる。健の家が西口、清子の家が東口にあつたからだ。

「じゃ、また明日。」

健が、いつもの様に言った。

「じゃあね。」

清子は、残念そうに言った。

「ただいま。」

健はこう言って玄関の扉を開けた。

「おかえり、健。」

「ちえ、今日はいつもどおり帰ってきやがったか。」

「賢治、和美、俺のこと、いい加減お兄ちゃんて言ってくれよな。」

健を出迎えたのは、健の妹である和美と、健の弟の賢治けんじであつた。基本的にこの家には親子関係以外の上下関係が存在しない。だから話すときは、こんな風に、いつもため口である。

健は、帰るとまず、お風呂を洗い、その後、洗濯物を片付ける。健の家は、母子家庭で、母親は、働きに出ていた。だから、大抵の家事は、三兄妹の長男である、健が代行していた。健たちの父親は、健が、7歳の時に行方不明になっていた。しばらくして、健たちの母親である、啓子が帰ってくると、健は、和美や賢治とともに、晩御飯を、食べ始める。

食べ終わったあと、健は、自分の部屋に入って、勉強を始めた。そして、入浴して、就寝の準備をする頃には、日付が、変わっていた。健は、ベットに横たわって、今日1日の出来事を、思い返した。帰りの、清子の質問が、どうも引くかかる。あの質問で、どんな事がわかるのだろう、と健は考えた。色々、考えを、めぐらせているうちに、健はいつのまにか、瞼を閉じて寝ていた・・・。

翌日、2013年1月25日、金曜日。

昨日の、木枯らしは、弱まり、昨日と比べると、若干、雲の多い晴れの朝であった。

健は、起きると、昨日と、同じ様に、身支度を整え、朝食を口に含み、「いってきます。」の掛け声で、学校に向かった。

昨日と同じ様に、教室に、始業の40分前には、教室の鍵を開け、教室の中に入っていた。昨日と同じ様に、あの人物が現れるのを、待っていた。

しばらくして、昨日と同じ様に、教室の前の方の扉が開き、彼女は、そこに、現れた。

「おはよう！清子。」

健は、清子の返事を期待して、いつもよりも大きな声で、清子に、挨拶を投げかけた。

「おはよう。」

今日の清子の挨拶には、いつもの明るさが感じられなかった。昨日とは、まるで立場が逆転していた。

清子は、昨日の様に、自分の席に座った。

健は、そんな、清子の姿を見て、清子の事が、とても心配になった。そして、清子に、こう話し掛けた。

「大丈夫か、清子。元氣ないみたいだけど。・・・なにかあったのか。なにかあるなら、俺に話してくれよ。」

健が、やさしい口調で、清子に語り掛けた。

「ねえ、健ちゃん。」

「なんだい。」

「もし、もしもの話なんだけど、その、私と全く同じ私がもう一人いるとしたら、健ちゃんはどする。」

清子から、昨日と、全く同じ質問を聞いた健は、昨日とは全く違う感想をもった。何かがあると、健は考えた。

「それって今、本当に起きてる事なんだろ。」

健は、揺さぶりを掛けたつもりだった。

「そつそそれは、えっえーと、あつ、心理テストみたいな物だよ。だから、」

「違う。」

「えつ。」

「だって、その質問、昨日も聞いた。清子に限って、昨日、話したことを、忘れたりなんかしない。俺にはわかる。今までだって、そんな事なかった。」

健の問いかけに、清子は、黙り込んだままだった。

しばらくして、教室の戸が開き、河岸と長山の二人が入って来た。しかし、今日は、特に、何も言われることはなかった。でも、何も起きずに終わるわけがなかった。

この日、クラスは、健と清子の話題で持ちきりだった。二人には、情報の発生源は、言われなくても見当はついていた。長山が、数人の女子と会話をしながら、笑顔で、二人の方向を、ちらちらと眺めていた。

今日一日、健と清子は、クラスメイトから、好奇の眼差しで見られていた。でも、二人にとっては、初めて世間から、カップルと認識されたことが、内心、うれしかった。二人とも、異性と付き合うのは、これが初めてだったからだ。

放課後、部活が終わって、健と清子の二人は、昨日と同じ様に、一緒に帰っていた。昨日とは打って変わって、二人の話は弾んでいた。s 駅に着いて、昨日と同じ快速電車に乗った後、健は、今朝の話を続きを、清子に切り出した。

「さっ清子。」

「なに。健ちゃん。」

「今朝の話しことだけど。」

「。。。。」

突然のことに、清子は、今朝の様に、黙り込んでしまった。健は、今日は、このまま、答えを聞けずに終わってしまうと、思っていた。

しかし、突然、彼女の返事は、帰ってきた。

「日曜日・・・。」

「えっ。」

「日曜日の10時、私の家に来て。明日は、一日、部活だし、ちよつどいいでしょ。」

「なんで？」

「こつ、健が言つと、清子は、小声でこつ言つた。」

「ここじゃ話せないでしょ。ねっ、だからお願い。」

「わつわかつた。日曜日な。覚えとく。」

二人は改札を出る。

「じゃあな。清子。」

「じゃあね、健ちゃん。また明日。」

清子の返事に、昨日よりも、活力を感じた。

家に帰った健は、昨日の様に、家事を手伝い、晩御飯を食べ、勉強して、ベツトに、身を放り出した。そして、一日の事を思い返す。

その中で健は、今日の帰りの出来事を思い出した。健は、清子に、丸め込まれた気がしていた。でも、日曜日なれば、とりあえずわかることだ。健は、自分に、そう言い聞かせた。この時、すべては、始まっていたのかもしれない。でも、健はその事実には、まだ気づいては、いなかった。

黒い影は、動きだそうとしていた。

第一章 告白（後書き）

読んでいただきまして、どうもありがとうございます。
今後は、なるべく毎週日曜日に更新しようと思っています。
評価、どしどしお寄せください。お待ちしております。

第二章 思惑

あれは、金曜日の帰りだったかな。俺が、その叫び声を聞いて、その家の前に立ち止まったのは。

「なんで、なんで僕じゃだめなんだよっ！」

俺は、少なくとも、叫んでいるのが、誰かは、わかっていた。この家には、中学校の時までは、よく来ていた。でもこの時は、なんで叫んでいるのか分からなかった。まさか数日後に起こる、あの事件の前触れだったなんて、この時は、ちっとも思わなかった。

2013年、1月27日、日曜日。時計には、そう表示されていた

る。

今日の朝は、いつもにも増して、起きるのが辛い。なんかいつもより寒い気がする。俺は、窓から外を見てみた。ちらちらと雪が降っている。でも積もってない……。16歳になった今でも俺は雪が降るたびに、積雪を期待している。弟や妹に馬鹿にされても仕方ないかとこの頃は思っている。

「健、朝ごはんできたわよー。降りていらっしやい。」

お母さんの声を聞いた俺は、私服に着替えて、自分の部屋を後にした。

今日の朝食は、ご飯、焼き魚、味噌汁と、いたって和風のメニュー。家族そろって、ゆっくり朝食なんて日曜日ぐらいだ。まあ俺の本当の目的は、テレビの特撮ものを見ることなんだが……。ここでも弟と妹によく突っ込まれる。

俺は、特撮ものを見終わった後、自分の部屋に戻った。俺は、時計に、目を向けた。時計は、9時2分を示していた。清子との、約束の時間まで、残り、1時間弱か。9時半ぐらいに出ればいいか。俺の気持ちは明らかに高ぶっていた。

しばらく、ぼーっとしていた。何も、考えずにベットに横になった。俺は、はっとなつて、また、時計に目をやった。時計は、9時55分を示していた。俺は、間に合わないかも知れないと思って、慌てて家を飛び出した。

俺の家から、清子の家まで、自転車で、10分位はかかる。俺は、

自転車を、かつ飛ばした。

ビルが立ち並ぶ駅前、東口の住宅街を抜けて、右手に、図書館、ショッピングモールが見えて、しばらく行った所に、清子の家はある。

「ピーンポーン。」

俺は息を切らせながら、表札に”水嶋”と書かれた家のインターホンを押す。俺の腕についた時計は、10時4分を示している。

「はい。どちら様でしょうか。」

インターホンから返事があった。俺はこの声を知っている、清子の弟、良介（よしすけ）の声だ。

「あー。石井ですけどー。」

雪のちらつく中、俺は白い息を吐きながら言った。

「あー、健兄ちゃん。お姉ちゃんに合いに来たんでしょ。待って、今、呼んで来るから。」

しばらくして、玄関の扉が、開いた。そこには、私服姿の清子が立っていた。

「健ちゃん、寒いでしょ、さあ、中に入って。」

清子が、笑って俺に言った。その笑顔は、いつもと変わらない様に見えた。俺は、「おじやまします。」の掛け声と共に、家に入る。

階段を上って、二階に上がると、廊下の突き当たりの左右に、ドアが一つずつある。右側が清子の弟、良介の部屋。左側が、清子の部屋だ。こんな風に説明できるくらい、俺は、この家にはよく来ていた。もちろん、昔は友達として。

「さあ、入って。」

清子は、こう言いながら、自分の部屋のドアを開けた。

俺は、自分が、今、見ているものが信じられなかった。まあ、予想していなかったといえば嘘になるが。

「さっ清子が、もう一人いる？なんで・・・。」

俺の目には、確かに写っていた。

最初に出迎えてくれた清子とは、服装は全然違う、髪も後ろで一つにまとめてある。

でも、その容姿、顔つきは、清子に瓜二つだ。

「ごめんね、健ちゃん。この事、黙っててさっ。」

部屋の中にいた、髪が一つ結びの”さやこ”は申し訳なさそうに俺に言った。声も、清子そのものだった。

「この前の、木曜日からなんだけどね・・・。」

ドアを開けてくれたショートヘアーの清子が、同じく俺に申し訳なさそうに言った。

そして、清子は、ドアを閉めて、俺の目の前にいる、”さやこ”と並んで見せた。背丈が全く同じで、まるで、双子の様であった。

「これって・・・。」

俺は、自分の目の前で起きていることが、今だに半信半疑だった。

「あっあれ、清子って双子だったのか？そんな事、一度も聞いたことないけどなー。」

俺は、必死に作り笑いをしながら言った。その場の空気を、なごませようと必死になっていた。

「健ちゃん。無理しないでいいよ。」

清子が心配しながら言った。

「まあ、座つてよ。」

”さやこ”が座布団を俺に差し出しながら言った。

俺と、清子と、”さやこ”は、それぞれ、自分の座布団に腰を降ろした。

「じゃ、とりあえず私から。私は、木曜日と土曜日に学校に来てた清子で。」

俺から見て右側に座った”さやこ”が、手を上げて言った。

「で、私が金曜日に学校に来てた清子。」

左側の清子が、同じく、手を上げて言った。俺は、いつのまにか、軽く頷いていた。

その時、俺は思った、だから同じ質問を二回してきたんだと、心の中で勝手に納得していた。

そこで俺は、二人の清子に聞いてみた。

「とつところでき、なんで二人になっちゃたの？」

「わかってたら、健ちゃんに相談なんてしてないよ。」

左側に座った清子が残念そうな顔をしながら俺に言ってきた。右側の”さやこ”も俺の言葉に落胆したようだ。

まずい、俺、悪いこと言っちゃたかな。とりあえず話題変えて気

分を明るくしないと。

「あのさー。」

「何、健ちゃん？」

二人同時に返事した。まるで双子みたいだな。

「何、笑ってるのよ？」

「いや、なんでもないよ。」

「そう。」

二人の清子は納得してくれたみたいだ。左側の清子も、右側の
さやこ” もいつのまにか笑顔になってる。

「そうだ、清子。」

「「なあーに？」」

「慎二^{しんじ}についてなんだけど。」

「大野くんが、どうかしたの？」

右側の”さやこ”が俺に返事を返してきた。

「慎二に何かあったんじゃないかって思っただ。」

「なんで？」

左側の清子が俺に問い掛けてきた。

「ハックション。」

誰か、僕の噂でもしているのかな。悪い噂じゃないといいんだけど。でも、今日はそんな事どうでもいいや。

僕は今、ある人たちを待っている。僕はその人たちに依頼して今日、ある事をやってもらうことになっている。僕がある事を依頼したきっかけ、それは、この前の木曜日に起こったんだ。

2013年1月24日木曜日、時計にはそう表示してあった。

今日も僕は、腕時計を気にしながら、学校に向かっていた。でも、僕にとっては特別な日だった。そう、清子ちゃんの誕生日だ。中学校卒業してから1度も会ってないけど元気でやってるかな。僕は、清子ちゃんに想いを馳せながら、紺色とクリーム色の帯びの快速電車に乗った。

僕が通う県立k高校は地元では有名な進学校だ。僕はその高校の野球部に所属している。朝練が6時半から、放課後は19時過ぎまで練習している。練習メニューは、はつきり言って辛いし、勉強だって難しい。けど清子ちゃんの事を思いだす度にがんばろうと思える。

今日も練習を終えて僕は、黄色と青の帯の電車に乗って帰っていた。僕の高校はg駅より下り側にあるから、行きも帰りも、電車はあんまり混雑しない。g駅到着のアナウンスが聞こえると僕は席を立って降りる準備をした。そしてドアが開くと同時に僕はホームに降り立った。次の瞬間、僕は見てしまった見たいけど、見たくない物を。

「あれは・・・清子ちゃん？隣にいるのは・・・石井くん。」

僕は見てしまった。石井くと手を繋ぎながら、笑顔で電車から降りてきた清子ちゃんの姿が。僕は、久しぶりに清子ちゃんの顔を見た、卒業してから見てないから、十ヶ月ぶりかな。全然変わっていないな。

僕と清子ちゃんと石井くんは、小学校の頃からの幼馴染。同じ日に同じクラスに転校した来たのがきっかけで、大の字が付くほどの親友になった。

石井くんや清子ちゃんは、僕とは違う高校に進学した。だから、会う機会も特になかった。連絡も殆ど取らなくなった。まさか、石井くん、清子ちゃんと付き合ってる？まさか、そんなことないよね。でも、思いあたる節がないわけでもなかった。僕は現実を目の当た

りにした。僕は駅を出てすぐの所で配っていたポケットティッシュを受け取ってポケットに突っ込んだ。そして僕は、一人寂しく家に帰った。

翌日、僕は、部活にも、勉強にも身が入らなかった。午後の練習も仮病で休んだ。顧問にばれたら説教部屋行きだけど、僕は全然気にしていなかった。しばらく街中を徘徊して、僕は家に帰った。

「なんで、なんで僕じゃだめなんだよっ！・・・なんで僕じゃなくって・・・。」

僕は、自分の中に溜まっていた思いをぶちまけた。こんな気持ちになったの、何年ぶりだろう。

ふと、僕はポケットに何か入っている事に気付いた。僕は、ポケットに手を入れてみた。なんだ、昨日、駅前で貰ったポケットティッシュか。でも、なんか入ってるぞ。

そのポケットティッシュの中には、黒を基調にした、怪しげのチラシが入っていた。そこには、こんな言葉が書かれていた。

”誘拐手助け承ります。”

そのチラシの内容を僕は食い入る様に見ていた。

”金額は一週間、一万円より、電話番号は、* * - * * * *です。逃走経路の要望もお聞きいたします。”

誘拐手伝い？僕は、そんな職業はじめて聞くな。普通なら、到底信じられない内容だろう。

でも、この時の僕には、これしかないと思った。

僕は引き出しから、通帳を取り出し残高を確認してみた。貯金は12万円、依頼するためのお金は十分にあった。

僕は、チラシの切れ端を見ながら、そのチラシの番号に電話を掛けた。

そして僕は、ベットに倒れこんだ。

「と言っわけなんだ。」

俺は金曜日の帰り、慎二が唸っていたことを清子たちに話した。

「そんな事があつたんだー。なんか心配だね。」
右側の清子が俺に言った。

俺は、話しをもとに戻そうとした、その時、

「あつ、私、トイレいつてくるね。その間、よろしくね。」

清子が”さやこ”にアイコンタクトをしながら言った。そして清子は部屋を出ていった。

「しょうがないか。じゃあ、本題に入るね。」

”さやこ”が笑顔で俺に言った。そして、木曜日の出来事を俺に語り始めた。

この前の木曜日の朝。

私は、いつもの様に目を覚ました。私は、いつもの様にベットの横にある、時計を見ようとしたんだ、けど・・。

私は、ベットの横のカーペットの上で寝ていたの。私は、変な気分だった。

なぜって、私は、昨日、ベットで寝たのを覚えているから。寝てる間に転がっちゃたのかな。最初、私はそう思った。とりあえず、私は起き上がってみた。私は、それに気付いた。

ベットに誰か寝てる。布団を全身にかぶっているから、すぐに誰かは、わからなかった。

誰だろうー。良介へ清子の弟かな、ママかな、まさかパパって事はないよね。でも、みんなここで眠る理由ないよね。もしかして泥棒？だつたらまずいよ。色んな事態を想像しながら、私は布団をとってみた。でも、そこには私が想像もしなかった人が寝てたいたの。

「きゃあー!!」

私は思わず声をあげてしまった。
でも、ベットで寝ている人物は、

「清子、朝から大声なんか出して一体なんなの？」

こう言って、私の部屋のドアを開けたのは、私のママだった。

「マッママ。そっそこ見て。」

私はベットの方を指差す。それに従って、ママは布団の中を覗きこんだ。

「なあーに……、って清子じゃないの。それがどうかしたの？」

「えっ……。」

「それより、もう朝ごはんできたから、着替えたら下におりてきてね。」

こう言い残してママは下に下りていった。

嘘でしょ……、なんで変だと思わないの？

私は、ベットに寝ている人物を見て思った。

「何してるの清子。早く降りていらっしやい。」

一階からママの声が聞こえる。

そうだ、忘れようと。なかった事にしよう。

こう考えた私は、布団をもとに戻した。そして高校の制服に着替えて、鞆を持って、部屋を出て一階に下りた。

リビングには、ママも、パパも、良介も、家族全員が揃っていた。いつもと変わらない、我が家の朝食の光景だった。私は、朝食を済ませて家を出た。

私は心細かった。自分の家族が信じられなかった。こんな気持ち初めてだった。今、私が頼れる人は健ちゃん一人しかないと思った。でもあんまり心配は掛けたくない。

だから私は、いつも以上に自分を明るく見せた。

健ちゃんはいつもの様に出迎えてくれた。

これだけでも私はとっても嬉しかった。

その後の、健ちゃんからの言葉はそれ以上に嬉しかった。

私は健ちゃんになら、なんでも言える気がしたの。

「ピーンポーン。」

家のインターホンが鳴った。

「誰だろう?。」

”さやこ”は話を中断して、窓から下の様子を覗きはじめた。

「えっ、あの人たち何？」

「どうした清子。そんなに顔を引きつらせて。」

俺は”さやこ”の指差す方向を見つめた。

「なんだ、あいつ等は。」

今の俺には、その言葉しか出なかった。

「はい。どちら様ですか。」

僕、水嶋良介はインターホン越しに言ってみた。けど、返事がない。

「がちやがちやかちや。」

「ちよつと、困りますよ。勝手に入ってこられちや。今はパパもママも・・・。」

玄関には、黒のスーツに、黒いズボン。黒いサングラスをかけた三人組の男たちが現れたいた。

「やれ。」

真中の飛びぬけて背の高い男が言った。残りの二人の男が僕に襲いかかってきた。

「ちよ、ちよつと何なんですかあななたちは。急に來たと思ったら僕の事を縛って。」

「この家に水嶋清子はいるな。」

さっきのノツポが僕に聞いてきた。

「僕の姉ですけど。それがなにか。」

「今何処にいる？」

「・・・・。」

「おい、答えろ！」

そう言つと、ノッポが銃のような物を僕に向けてきた。

「ここにいるのはわかつてるんだよ！」

第三章 失敗と成功（前書き）

お待たせいたしました。第3章のスタートです。

第三章 失敗と成功

僕の前に黒いワゴン車が止まった。中からは、服装が黒で統一され、サングラスをかけた三人組が降りてきた。

「大野慎二様ですね？この度は、ご利用ありがとうございます！」

一番背の高い男が、サングラスをとり、不気味なくらいの笑顔で僕に言った。そして名刺を僕に差し出してきた。名前は”千野”さんと言うらしい。残りの二人も同じように名刺を僕に差し出した。一番小さい人が”岡谷”さん。一番太っている人が”諏訪”さんと言うそうだ。でも、そんな格好で、そんな言われても、物凄く違和感を感じる。

僕は、依頼料の入った茶封筒を、千野さんに渡した。

「まいどうも！では中へどうぞ。」

そう言つと、彼らは、僕を車の中に誘導した。僕はためらうことなく、車に乗りこんだ。

「では、先日の打ち合わせ通りでよろしいですね。」

千野さんが日程の書かれた紙を僕に見せながら言った。僕は、同意の意味で軽く頷いた。それを確認した千野さんは、エンジンを始動させ、黒いワゴン車を発進させた。

出発してから約5分、車は清子ちゃんの家少し手前で止まった。

「大野様。少しここで待っていてくださいねー。」

千野さんが笑顔でこう言うと、残りの二人を引きつれて清子ちゃんの家の方に向かっていった。でも待っていてくださいと言われると、僕は余計に様子を見てみたくなる。僕は車のドアを開け、ゆっくりと、清子ちゃんの家に近い。そして家のドアに耳をあてた。

「ここに居るのはわかってるんだよ！」

家の中から怒鳴り声が聞こえた。多分、千野さんの声だろうな。それにしても迫力ある声だな。

「きゃあー！！！」

この悲鳴、清子ちゃん！？一体何してるんだよ。僕がそう思っていると、人がドアの方に歩いてくるのが聞こえた。僕は急いで車の中に戻った。

「ガチャ。」

ドアが開いて、千野さんが中から出てきた

「お前ら！！清子をどこに連れていく気だっ！！」

車の中だから聞きくいけど、この声は多分、石井くんだろう。

「今は分からないだろう。だがお前にも、時期に分かることだ！」

こう言った後、千野さんが誰かを抱えながら車に戻ってきた。ワゴンの扉を開け、抱えてきた人物を僕の隣に座らせると、千野さんは言った。

「じゃあ、行きましようか。」

千野さんは、不適な笑みを浮かべながらワゴンを急発進させた。

「残りの二人は置いてつていいんですか？」

「大丈夫ですよ、大野様。心配なさらなくても。」

僕の問いかけに、千野さんは当然の様に答えた。僕は、自分の隣に座っている清子ちゃんの顔を見た。恐らく睡眠薬でも飲まされているのだろう。ぐっすり眠っている。これで僕は清子ちゃんを手に入れたわけだ。でも、こんな方法を使って良かったのだろうか。僕の心には、少なからず罪悪感があった。

あれ、僕、眠ってた？いつのまに。今何時だろう・・・、7時2分？もう朝になったのか。でも、あんまり明るくないなー。そういえば、ここってどこ？薄暗くてよく見えない。少なくとも僕が指定した場所ではないことは確かだ。四方が壁に囲まれてて、出口らしき物は2箇所しかない。しかも、どっちの出口も鍵が掛かっていて、そう簡単に出られないようだ。

僕が脱出方法について、あれこれ考えていると、僕は部屋の壁に、二人の人影を見つけた。僕は、のっそりと、その人影に近づいてみた。

「どっどっなってるんだ？」

僕は、今、自分が見ているものが、とてもじゃないけど信じられなかった。予想外だった。

”おはようございます。今日は、1月31日、木曜日です。”
テレビは、そう伝えている。”さやこ”が誘拐されてから、もう4日も経つのか。あの時、俺にもっと冷静に行動していれば、連れ去られることもなかったかもしれない。あの後、俺は一日中、”さやこ”を必死に探しまわった。けど小さな手がかりすら見つけられなかった。警察にも捜査を依頼した。でも、まだ居場所は見当もつかないとのことだった。

とは言っても、他人から見れば、何の変化もない日常に見えることだろう。なぜなら、俺の席の隣には、いつもの様に、清子の姿があるからだ。

4日前の事件で唯一の救いは、あの時、清子がトイレに入っていた事だ。だから、奴らには気付かれず、清子は誘拐されなくて済んだのだ。あれから4日間、俺も清子も、いつも通りに学校に行って、部活をこなしてきた。そうして4日前の悲劇を忘れようとした。

今日も、今までと同じ様に、俺は誰もいない教室に入って清子の事を待っていた。

「おっおはよう。」

清子が教室に入ってきた。俺は今までと同じ様に挨拶を返した。

「あのさ、健ちゃん。」

清子が俺に聞いてきた。俺が何かあったかと聞き返すと、清子は予想外な言葉を俺にぶつけてきた。

「私、また増えちゃた。ごめん。」

第三章 失敗と成功（後書き）

テスト勉強の次は資格試験の勉強でな感じで更新が、かなり遅れてしまいました。今回はかなり短めに作ってあるので少し物足りないかもしれませんが。本当にすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245d/>

僕の、億千万人の恋人たち。

2011年1月12日20時57分発行